

「一致」という用語にまつわる問題点とジェンドリンによる解決案

関西大学大学院心理学研究科

田中秀男

◆要約◆

一般に、カール・ロジャーズは、ウィスコンシンでの統合失調症治療プロジェクトを経て、それまで以上にセラピストの「一致」した態度を重視するようになったと言われている。その一方、ユージン・ジェンドリンは、当プロジェクトの重要な論客であったにもかかわらず、「一致」という用語を使うことがごくまれである。本稿では、ジェンドリンが「一致」という用語にどのような問題点を感じ、解決を図ろうとしたのかを、彼の初期の主著『体験過程と意味の創造』の観点から解明する。この解決案により、フォーカシングにおける「ぴったり」という言葉を使う際に陥りがちな誤解を防ぐための留意点を提示する。

キーワード：一致、ぴったり、体験過程と意味の創造

I 「一致」や「ぴったり」という用語法を再検討する意義

従来、心理療法やフォーカシングにおいて、言葉と経験 (experience: 体験とも訳される) とが「一致」することや「ぴったり」することが目標であると素朴に信じられてきた。しかし、「一致 (congruence)」や「ぴったり (match)」といった用語を使うことが、時にある重要な治療的变化を捉えそこなう危険性があることを、本稿では主にユージン・ジェンドリンの著作をカール・ロジャーズの著作と対比させることによって指摘する。この指摘をもとに、重要な治療的变化を捉えそこなう危険性を防ぐ理論的な

解決案を提示する。

一般的に、ロジャーズは、ウィスコンシンでの統合失調症治療プロジェクト(1957～63年)を経て、「それまで以上に、三つの基本的な姿勢の中で自己一致がより重要であると考えようになっていった」(佐々木, 2005, p.186)と言われている。その一方、ジェンドリンは、当プロジェクトの重要な論客であったにもかかわらず、「一致」という用語を使うことは、一部の例外を除いてほとんどない。この事実は、ジェンドリンが、一致の同義語とされる「純粋性 (genuineness)」の方であれば一貫して肯定的に使っていたのとは対照的である。「一致」という用語法や説明図式をあえて使わなかった理

由として、近年のジェンドリンは、「体験過程は、言語化されたものや行為とは大いに異なり、(二つの三角形どうしのように)型が等しいという意味で一致することなどどだい不可能なのだ」(Gendlin, 1999, p.204)と述懐している。

用語「一致」に対するジェンドリンの批判的見解をおさえるために、まず、「一致」という言葉の原語と訳語を確認することにしたい。ロジャーズの用語「一致」の原語は、“congruence”である。英語の congruence とは、幾何学の「合同」を意味する言葉でもある。先の Gendlin (1999) で指摘されているように、2つの型が等しいことを意味する。congruence の意味として「合同」が含まれることは、『クライアント中心療法』(Rogers, 1951)において、二つの円の重なりを用いてパーソナリティ理論を説明している (pp.526-527) ことから、ロジャーズ本人も当初から自覚していたことがうかがえる。一方、日本語の「一致」とは、国語辞典『大辞泉』によれば、「①二つ以上のものがぴったり一つになること。くいちがいなく同じであること。合致。②ごく普通の道理」を意味するとある。このうち、①の例文としては「指紋が一致する」「意見の一致をみる」「満場一致」が挙げられている (松村, 1998, p.165)。これら例文の中では、とりわけ「指紋が一致する」の用例が、合同を意味する英語の congruence のニュアンスを伝えているといえよう。

ジェンドリンは、幾何学の「合同」を意味する「一致」という静的な用語を使うことを意図的に避け、「体験過程 (experiencing)」「推進 (carrying forward)」などといった、より動的な用語を導入することを提唱した。例えば、「体験過程」という用語を導入したことで、ジェンドリンは、一致に関する論述には「体験過程が概念的内容と同一視されている」「意識的な感情が暗的な意味を含むことが正確に理解されていない」といった欠陥があることを指摘することができたのである (Gendlin, 1958/1962)。こうしたジェンドリンの指摘に基づき、「一致」

という用語を使用することにより陥る理論的困難を、筆者は問題点3点に整理する。「1. 象徴化のあとの更なる変化が説明できない。2. 象徴化が様々であることが説明できない。3. 象徴化内容が変わらなくても治療的变化が起こることが説明できない」の3点である。

上記問題点3点とこれら3点への解決案を示すため、以下では、まず、ロジャーズにおける「一致」の定義と、その位置づけの変遷とを確認する。次に、日本語で出版されたフォーカシング先行研究において、「一致」という用語の使用に対する問題提起が近年わずかながら出てきたことを紹介する。続いて、ジェンドリンが「一致」という用語をどのように問題視し、いかにその解決を図ったかを、彼の初期の主著『体験過程と意味の創造』の観点から筆者が具体的に解明する。最後に、「一致」という用語の見直しは、必然的にフォーカシング用語「ぴったり」の見直しも要請することを指摘する。これにより、今後のフォーカシング教育における留意点を提案する。

II ロジャーズにおける「一致」

ロジャーズは、「一致」という用語を、人間一般の状態に関する構成概念として使った (Rogers, 1959)。その後、セラピストの一致した態度は、他の態度条件よりも、ロジャーズ派が後年になってますます重視するようになった (Rogers, 1966; Gendlin, 1963)。

一般に、ロジャーズが「(自己)一致 / 不一致 (congruence / incongruence)」という用語を使うとき、一致するものは何か。彼は、「自己 (概念)」と「経験」とが一致する / しないと呼んだ。論文「クライアント中心療法の枠組みから発展したセラピー、パーソナリティおよび対人関係の理論」(Rogers, 1959)¹⁾を中心に解説する。

知覚された自己と有機体の実験とのあい

だにずれが生じ始めることがよくある。…(中略)
…このようなずれが存在するとき、その状態は自己と経験との不一致の状態であるといえる。(Rogers, 1959, p.203)²⁾

上記のように、「不一致／一致」などといった用語が使われる場合、Rogers (1959) においては、人間一般の状態に関する構成概念としてまず提示されている。

Rogers (1959) では、構成概念の様々な提示 (pp.194-212) に続き、セラピーおよびパーソナリティ変化の理論 (pp.212-221) が述べられている。まず、セラピーの文脈における「一致」ということで、一般に知られているのは、セラピスト側の態度のことである。この「一致」は「純粋性 (genuineness)」とも呼ばれた。

治療関係におけるセラピストの一致もしくは純粋性が意味するのは、セラピーが最も効果的であるならば、治療関係におけるセラピスト自身の経験の象徴化が正確でなければならない、ということである。(Rogers, 1959, p.214)

…もしセラピストが治療関係のなかで脅威や不快感を経験しているながらも、クライアントを受容し理解していることにしか気づいていないならば、治療関係においてセラピストは一致しておらず、セラピーは阻害されるだろう。(Rogers, 1959, p.214)

ここでいう象徴化とは、「我々の経験の一部を象徴的に表わすこと」(Rogers, 1959, p.198) である。例えば、有機体の実際の経験「脅威・不快感」と、知覚された自己「クライアントを受容し理解している私」とが不一致ならば、象徴化が不正確ということになる。セラピストが一致した態度を回復することが、セラピーが阻害されないためには望ましいとされた。

次に、セラピーの文脈における「一致」ということで、他にも見過ごせないのは、クライアント側の状態のことである。

…治療的経験の中で人は、正確に象徴化された経験と一致するように自己概念を改めていくようにみえる。…(中略)…人は自分自身について抱いている概念を、以前には自己と矛盾していた特徴を含むように再体制化する。このように、自己経験が正確に象徴化され、この正確に象徴化された形で自己概念の中に含まれる場合が、自己と経験との一致の状態である。(Rogers, 1959, pp.205-206)

例えば、治療の開始時にクライアントの知覚された自己「父への尊敬」と有機体の実際の経験「父への嫌悪」とは不一致であり、治療が進むにつれてクライアントの自己概念が改まる。この改まりによって、「正確な象徴化 (accurate symbolization)」(Rogers, 1959, pp.198-199) が要請される。クライアントは、自分自身について抱いている概念「父への尊敬」を以前には自己と矛盾していた特徴「父への嫌悪」を含むように再体制化することで、より「一致」した状態に達するとされた。

以上、ロジャーズが「一致」を最初に定式化した様子を確認したのに続き、彼の「一致」に対する位置づけの変遷を検討する。ロジャーズ研究者の間での共有された見解は次の通りである。ロジャーズ派は、ウィスコンシンでの統合失調症治療プロジェクト (1957～63年) を経て、「無条件の肯定的配慮 (受容)」や「共感」といったセラピストの他の態度条件よりも、「一致」がより重要とされるようになったというものである (佐々木, 2005, p.186)。以下、この見解の根拠と思われる、古くから日本語訳のある2つの文献を確認する。

ロジャーズ自身は「かなりの程度の無条件の肯定的配慮なくして、十分な強さの共感ほとんど存在しえない」と他の二つの条件を挙げつつも、「治療関係の中で意味をもつ」ためには「純粋性もしくは一致が、三つの条件のうち最も基本的なものであると私には思われる」(Rogers, 1966, p.184) と述べている。

一方、ウィスコンシン時代のジェンドリンが、こうしたロジャーズの見解を支持したと思われるような見解を述べている。

ロジャーズは、心理療法における必要十分な三条件を設定した。三条件とは、「共感」、「無条件の配慮」、そして、「一致」もしくは「純粋性」である。最後の「一致」というのは、セラピストが個人的あるいは職業的な人為性や策略や姿勢を捨てようと試み、「セラピスト自身である」ことを意味する。統合失調症者の治療に我々が従事する際に、この一致という条件は、ますます重要となってきた。(Gendlin, 1963, pp.109-110)

以上で挙げた Rogers (1966) と Gendlin (1963) は、早くから日本語訳が出版され、国内で研究対象とされてきた。従って、ロジャーズ派の発展において、ジェンドリンは「一致」の重視を支持した重要な論客であるとみなされ、とりたてて疑問をもたれることがない時代が長らく続いた。

III 用語「一致」に対して： フォーカシング指向の先行研究から

近年になって、日本語のフォーカシング文献においては、「一致」という用語に対して批判的検討が徐々になされるようになってきた。以下の2つの文献は、フォーカシング指向の文脈において、一致という用語法の批判者というジェンドリン像に着目した見解を提示している。

…一致・不一致という、すでにある「形」と「形」が同じか同じでないか、という概念で説明すること自体無理があるのです。一致・不一致の図で静的な状態の説明はできても、それでは「変化」の説明にはなりません。(近田, 2002, p.37)

一致(あるものと他のものとがぴったりするこ

と(matching))という幾何学的な比喩自体を、撤回する必要があるだろう…。(パートン, 2006, p.216. 訳文は筆者改訳)

しかし、近田(2002)やパートン(2006)の両見解をもってしても、一致・不一致という静的な説明・比喩ではどんな困難に陥るのか、より動的な用語法を導入することで治療的变化の新たな側面がどのように捉えられるのか、そうしたそもそものジェンドリンの意図が具体的に知られるまでには至らなかった。

IV 用語「一致」に対して：筆者の立場から

実は、本稿IIで引用したようなかたちでジェンドリンが「一致」という用語を使うことは、例外的であり、むしろ「一致」という用語法を当初から問題視していた。ジェンドリンが指摘したその問題点と解決案とを筆者の観点から整理する。

ジェンドリンは、「セラピストが個人的あるいは職業的な人為性や策略や姿勢を捨てようと」試みる態度そのものを支持している点において、終始一貫している。

カール・ロジャーズが、「純粋性(genuineness)」を、「共感」および「無条件の肯定的配慮」とともに)セラピーの三条件の一つとして設定したことは、まことに正しかった。(Gendlin, 1996, p.296)

このように、「一致」の同義語とされる「純粋性」という用語ならば、30年以上経た著作においても、肯定的に使っている。要は、ジェンドリンが問題視したのは、セラピストの態度やクライアントの状態そのものではなく、あくまで、そうした態度や状態に対する呼び名や説明図式の方なのである。

本稿は、基本的には、「一致」批判者としてのジェンドリン像に着目した点に関して、先行

研究の近田（2002）やパートン（2006）の見解に賛同する。しかし、パートンの見解の根拠とは異なる点がある。パートンの根拠は、言語が非言語的な現実には「一致」するという考え方が後期ウィトゲンシュタインの哲学によって批判にさらされたから、というものである（パートン、2006、p.216）。一方、筆者の見解の根拠は、そうした外からの批判によってではなく、ジェンドリン本人が元々自発的に「一致」という用語法を問題視していたから、というものである。

実際のところ、ジェンドリンの著作において、「一致」という用語が肯定的に使われているのは、ウィスコンシン・プロジェクトの時代に、彼の師匠であるロジャーズの心理療法論を紹介する文脈においてのみである。例外的に使用された論文の邦訳がたまたま早くから紹介され、注目されてしまったというのが実情である。むしろ、ジェンドリンが持論を展開する大部分の著作において、「一致」という用語は使われていない。

「一致」という用語が持論で採用されなかった理由を探るため、ジェンドリン初期の名著、『体験過程と意味の創造』（Gendlin, 1962）に着目する。この著作は、公刊の4年前に博士論文として既に執筆されていた（Gendlin, 1958）。すなわち、ウィスコンシン・プロジェクトの成果が十分に上がるよりも前に、後期ウィトゲンシュタインへの積極的な言及（Gendlin, 1973）がなされるよりもはるかに前に執筆されたことを意味する。

Gendlin（1962）において彼は、「経験」についての“ロジャーズの”定義（Rogers, 1959, p.197）を引き合いに出したうえで、批判的コメントをする。

「経験」とは、人の中に設定された内容からなっている。こうした内容は、意識の中であろうが、意識に昇ることが否認されようが、その性質上、同じであることになる。…（中略）…意識に昇ることが否認された場合、こうした同じ内容が、あたかも概念化なしの明在的な（explicit）内容

であるかのように、その人の中にそれでもなお設定されることになる。例えば、「自己概念」は、「経験」と「ぴったりする（match）」とか「ぴったりしない」とか言われる。このことは、「経験」が概念と同じ種類の何かであることを示唆している。（Gendlin, 1962, pp.242-243）

そして、ジェンドリンは、「経験についての設定された概念的内容と、意識的な概念的内容とを、イコールで結ぶこと」（Gendlin, 1962, p.253）が、ロジャーズのいう「一致」であると特徴付ける。そのうえで、一致に関する論述の欠陥（deficiencies）は、「(1)体験過程が概念的内容と同一視されていること、(2)意識的な感情が暗在的な（implicit）意味を含むことが正確に理解されていないこと」（Gendlin, 1962, p.253）の二点にあると指摘する。このような欠陥ゆえに、ジェンドリンは持論の展開において、「一致」という用語の使用を意図的に避けた。

そこで、「一致」という用語を使うことにより陥る理論的困難について、筆者の観点から問題点3点を改めて挙げ、その理由をそれぞれ述べる。問題点1として、象徴化のあとの更なる変化が説明できないことが挙げられる。なぜなら、「合同」を意味する「一致」では、心の中にあつたモノを言い当てればそれで終わりという印象を与えてしまうからである。問題点2として、象徴化が様々であることが説明できないことが挙げられる。なぜなら、「合同」を意味する「一致」では、象徴化が、あたかも一通りしかありえないような印象を与えてしまうからである。問題点3として、象徴化内容が変わらなくても治療的变化が起こることが説明できないことが挙げられる。なぜなら、「合同」を意味する「一致」では、治療開始期と同じ象徴化内容を長い治療期間を経たのちにもクライアントがふさわしいと思って再び象徴化した場合、そこで起こっている重要な変化を含まないと誤解される危険性があるからである。

こうした問題点に対するジェンドリンの解決

案は、「一致」という静的な用語を避け、「体験過程 (experiencing)」などの動的な用語法を導入することであった。これにより、実践における治療的变化の新たな側面を理論の上にもすくい上げようとしたのである。

「体験過程」は多くの異なった概念化が可能だが、体験過程そのものはこうして概念化されたものの明在的な概念的内容ではない。体験過程を暗在的に有意味と呼ぶことは、体験過程が多くの概念化を引き起こし得ることと、体験過程を概念化したものをその暗在的な意味に対してチェックすることができることに注目することである。(Gendlin, 1962, p.243)

以上、ジェンドリンによる解決案を導入することにより、先に挙げた3つの問題点が説明可能となる。

まず、「問題点1 正確な象徴化の後の更なる変化が説明不可能」だった点は、以下のようにつまみ直すことができる。ジェンドリンは次のような事実注目する。

思っていたことがきちんと言えたとき、思っていたことは全く同じままではなくなる。より豊かになり、よりはっきりして、より十分にわかったものになっているのだ。(Gendlin, 1962, p.120)

そして、概念的内容とは別の種類の性質を表わす用語「体験過程」を導入する。

しばしば見受けられることだが、クライアントが体験過程に注意を向けつつ語っていくうちに、さらに体験過程が生じてきて、いったん言葉にしたものが不十分になるのだ。(Gendlin, 1962, p.235)

このように、象徴化を二つのモノの一致と見なさなければ、生じた体験過程からさらに象徴

化が起こることが説明できる。

次に、「問題点2 象徴化が様々であることが説明不可能」だった点は、以下のようにつまみ直すことができる。ジェンドリンは、「体験過程をどのように象徴化するか、その仕方は様々で、数えられない」(Gendlin, 1962, p.208)という。例えば、ジェンドリンは、同じクライアントの表現でも、異なる学派のセラピストによって、表現の出どころの体験過程をどう見立てて応答するかが、三者三様であるという例を挙げている。

こうした三種類のカウンセラーの誰でも、クライアントがどんな感情を象徴化するにあたって手助けすることができるのだ。手助けする言葉はおのおのかなり違っているかもしれないが、カウンセラーは自分自身の言い方で何かを言うことができる。これに対してクライアントは、ほっとして「本当にそのとおりです」と言うことであろう。だからといって、どんな言葉かけでも間違いはないなどというつもりはない。間違いはないどころか、正しくて正確な象徴化 (correct, accurate symbolization) 以外は、すべて間違いである。だが、全く正確な象徴化が数多くあり得るのだ！(Gendlin, 1962, p.121)

暗在的に有意味な体験過程は、「多くの概念化を引き起こし得る」。このように、象徴化を二つのモノの一致と見なさなければ、一通り以上の象徴化があり得ることが説明できる。

最後に、「問題点3 象徴化内容が変わらなくても治療的变化が起こることが説明不可能」だった点は、以下のようにつまみ直すことができる。ジェンドリンは、治療の開始期とその後で、クライアントの象徴化内容が同じである事例に言及する。

クライアントは、自分についてのあることをずっと次のように言い張ってきた。「私は拒否されるのを恐れているんです」。セラピーの時間が多

く費やされたのち、クライアントはそう言い張っていた感情にふと気づく。クライアントは自分が拒否されるのを恐れていることをあらためて発見するのだ。そしてたいていの場合、クライアントは次のような事実にいささか困惑する。感情は新しく、違っており、驚くべきものだ。にもかかわらず、そうした感情にとって、古くて陳腐な「私は拒否されるのを恐れている」以上のより良い言葉がないのである。(Gendlin, 1962, p.234)

ロジャーズの実践はともかく、その理論上は、二つの円がより重なるという「合同」の説明図式を用いてしまうため、この事例で起こった治療的变化の重要な側面が見落とされがちになる。一方、ジェンドリンは上記の事例を治療の停滞や堂々巡りとして挙げたのではない。

…クライアントの言葉は以前と同じ古い言葉だが、その言葉が今指し示している体験過程は新しい。関連するもの (relevance) としてのこの新しい体験過程によって、古い言葉についての全く違った理解ができるのだ。(Gendlin, 1962, p.130)

このように、象徴化を二つのモノの一致と見なさなければ、象徴化内容が変わらなくても治療的变化が起こっていることにより注目した説明ができるのである。

V フォーカシングにおける「ぴったり」への留意点

「一致」という用語の見直しによって、フォーカシングにおける「ぴったり」という言葉の用法の見直しも必然的に要請される。

従来のジェンドリンは、『フォーカシング 第2版』(Gendlin, 1981) のような一般的解説書において、「ぴったり (match)」という言葉を多用していた。

言葉 (あるいはイメージ) とフェルトセンスとの間を行ったり来たりしてみよう。正しいだろうか。言葉とフェルトセンスがぴったりしたら、ぴったりしている感覚 (sensation of matching) を何度か味わってみよう。(Gendlin, 1981, pp.173-174)

完全なぴったり (perfect match) が得られ、言葉が感情に対してまさに正しかったとき、しばらくの間それをからだに感じさせてみよう。あなたは、そこで、「そう……その通り……それでいい」と言いたい気持ちに駆られ、その状態のままにしておきたくなるかもしれない。(Gendlin, 1981, p.57)

しかし、ここで言う「ぴったり」を日常語の語感通りに受け取ると、「一致」という用語を採用しなかったジェンドリンの意図は覆い隠され、結局のところ、元の木阿弥と化してしまう。その理由を知るため、日常語における「ぴったり」の語感とその問題点とを確認する。例えば、日常語では「リーバイス 505 が私の足腰と『ぴったり』する」のように使われる。この場合、特定の型のジーンズが「ぴったり」することによって、私の足腰の輪郭に更なる変化が起こることはありえない。また、一定の輪郭を持った私の足腰に対し、輪郭の異なるリーバイス 505 と 501 とが等しく「ぴったり」することも原理的にありえない。以上のような理由から、日常語の「ぴったり」を、ことばとフェルトセンスとの関係にそのまま当てはめた場合、先に挙げた「一致」という用語の問題点1や2と同様の困難が生じるのである。

そのため、近年のジェンドリンは、心理療法誌に寄稿した学術論文において、「ぴったり」や「一致」をめぐって起きやすい誤解に注意を促している。

哲学者として、何年か前から私は次のように認識するようになった。発言内容を経験と突き合

わせ、それらが「ぴったり (match)」するかどうかも確かめる手立てなどないのだ、と。体験過程は、言語化されたものや行為とは大いに異なり、(二つの三角形どうしのように)型が等しいという意味で一致すること (congruence) などどだい不可能なのである。… (中略) …体験過程は、単なる一つの型を持つわけでもなければ、言葉と突き合わされるような「命題的内容」でもない。そして体験過程は、あらゆる発言や思考に回答して刻一刻と変化するのである。(Gendlin, 1999, p. 204)

上記の、カッコつきのいわゆる「ぴったり (match)」への批判は、フォーカシング提唱者としての自身の見解を撤回して、共鳴のステップなど不可能だったと言っているわけではない。むしろ、Gendlin (1962) におけるそもそもの持論をより先鋭化したといえる。

「あらゆる発言や思考に回答して刻一刻と変化する」現象を記述するため、彼はのちの「人格変化の一理論」(Gendlin, 1964)以降、「推進 (carrying forward)」という動的な用語を導入する必然性があったといえよう。なぜなら、この用語であれば、最初からあったモノを言い当てて終わりではなく、さらに「前へ」という意味合いを持たせることができるからである。

今後も、フォーカシング研究者は「ぴったり」という言葉を使ってフォーカシングを教えざるをえないことはたしかである。しかし、本稿IVで挙げた初期ジェンドリンに基づく3つの問題提起とその解決案に留意しつつ、フォーカシングが教えられ、研究されることが肝要だということを筆者は重ねて提起したい。例えば、まず、心理療法においては、クライアントが使っていない言葉や、セラピストが使って回答しても、クライアントの体験過程を進展させることが可能である。次に、ジェンドリン第二の実践TAEの序盤においては、作ったセンテンスの一部に下線を引き、そこを空欄にして意味の異なる言葉を入れることが可能である (Gendlin

& Hendricks, 2004, p. 13)。以上二点のようなことが可能な理由は、そもそも体験過程が、さまざまな言葉に回答できるのであって、二つの図形どうしのように型が等しいという意味で言葉と一致するのではないからなのである。

付記

本稿は、日本人間性心理学会第32回大会(大正大学, 2013年9月15日)における口頭発表の原稿を加筆修正したものです。同発表にて座長をしていただいた久羽康先生に御礼申し上げます。また本稿を執筆するにあたり、ご指導いただいた関西大学大学院文学研究科の三村尚彦教授、心理学研究科の池見陽教授に御礼申し上げます。

注

- 1) この論文は、公刊の4年前、つまり、ウィスコンシン統合失調症プロジェクトが始まる前に、シカゴ大学内部資料 (Rogers, 1955) として既に執筆されていた。
- 2) 以下、本稿における英語引用文の日本語訳は、既訳を参照しつつも、訳語を統一する都合上、すべて筆者訳である。

文 献

- 近田輝行 (2002): フォーカシングで身につけるカウンセリングの基本: クライアント中心療法を本当に役立てるために コスモス・ライブラリー。
- Gendlin, E.T. (1958): *The Function of Experiencing in Symbolization*. Doctoral dissertation. University of Chicago, Department of Philosophy.
- Gendlin, E.T. (1962): *Experiencing and the Creation of Meaning: A Philosophical and Psychological Approach to the Subjective*. New York: Free Press of Glencoe. ユージン・T・ジェンドリン 筒井健雄 (訳) (1993): 体験過程と意味の創造 ぶっく東京。
- Gendlin, E.T. (1963): Subverbal communication and therapist expressivity: trends in client-centered therapy with schizophrenics. *Journal of Existential Psychiatry*, 4(14), 105-120. ユージン・T・ジェンドリン 村瀬孝雄 (訳) (1966): 言語下のコミュニケーションと治療者の自己表明性 村瀬孝雄 (編) 体験過程と心理療法 牧書店 190-206.
- Gendlin, E.T. (1964): A theory of personality change. In Worchel & Byrne (Eds.), *Personality change*. New York: John Wiley & Sons. 100-148. ユージン・T・ジェンドリン 村瀬孝雄・池見陽 (訳) (1966): 人格変化の一理論 ユージン・T・ジェンドリン・池見陽 (著) セラピープロセスの小さな一歩: フォーカ

- シングからの人間理解 金剛出版 165-231.
- Gendlin, E.T. (1973): Experiential phenomenology. In Natanson, M. (Ed.), *Phenomenology and the Social Sciences*. 1, Evanston: Northwestern University Press, 281-319.
- Gendlin, E.T. (1981): *Focusing*. 2nd ed. New York: Bantam Books. ユージン・T・ジェンドリン 村山正治・都留春夫・村瀬孝雄 (訳) (1982): フォーカシング 福村出版.
- Gendlin, E.T. (1996): *Focusing-Oriented Psychotherapy: A Manual of the Experiential Method*. New York: Guilford. ユージン・T・ジェンドリン 村瀬孝雄・池見陽・日笠摩子 (監訳) (1999): フォーカシング指向心理療法〈下〉金剛出版.
- Gendlin, E.T. (1999): Authenticity after postmodernism. *Changes: An International Journal of Psychology and Psychotherapy*, 17(3), 203-212.
- Gendlin, E.T. & Hendricks, M. (2004): Thinking at the edge (TAE) steps. *The Folio: A Journal for Focusing and Experiential Therapy*, 19(1), 12-24.
- 松村明 (監修) (1998): 大辞泉 増補・新装版 小学館.
- Purton, C. (2004): *Person-Centred Therapy: The Focusing-Oriented Approach*. Basingstoke: Palgrave Macmillan. キャンベル・パートン 日笠摩子 (訳) (2006): パーソン・センタード・セラピー: フォーカシング指向の観点から 金剛出版.
- Rogers, C.R. (1951): *Client-Centered Therapy: Its Current Practice, Implications, and Theory*. Boston: Houghton Mifflin. カール・R・ロジャーズ 保坂亨・諸富祥彦・末武康弘 (訳) (2005): クライアント中心療法 岩崎学術出版社.
- Rogers, C.R. (1955): A theory of therapy, personality and interpersonal relationships, as developed in the client-centered framework. *Discussion Papers* (University of Chicago, Counseling Center), 1(5).
- Rogers, C.R. (1959): A theory of therapy, personality and interpersonal relationships, as developed in the client-centered framework. In Koch, S. (Ed.), *Psychology: A Study of Science*. 3, New York: McGraw-Hill. 184-256. カール・R・ロジャーズ 畠瀬稔ら (訳) (1967): クライアント中心療法の立場から発展したセラピー, パースナリティおよび対人関係の理論 伊東博 (編) ロージャズ全集 第8巻 パースナリティ理論 岩崎学術出版社 165-270.
- Rogers, C.R. (1966): Client-centered therapy. In Arieti, S. (Ed.), *American Handbook of Psychiatry*. 3, New York: Basic Books. 183-200. カール・R・ロジャーズ 伊東博 (訳) (1967): クライアント中心療法 伊東博 (編) ロージャズ全集 第15巻 クライアント中心療法の最近の発展 岩崎学術出版社 255-297.
- 佐々木正宏 (2005): クライアント中心のカウンセリング 駿河台出版社.

ABSTRACT**Some Issues about the Term “Congruence” and the Solutions Proposed
by Gendlin****TANAKA, Hideo**Graduate School of Psychology, Kansai University

It is generally said that Carl Rogers came to emphasize the “congruent” attitude of the therapist through the Wisconsin Project. On the other hand, Eugene Gendlin, despite being one of the most important theorists of the project, rarely uses the term “congruence” in his works. In this article, the author clarified how Gendlin saw the term “congruence” as a problem and how he resolved the problem, on the bases of his early primary work *Experiencing and the Creation of Meaning*. With this clarification, the author sets out to explore how to prevent misuses of the word “match” in *Focusing*.

Key Wordscongruence, match, *Experiencing and the Creation of Meaning*